様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 １４ 日現在

機関番号：３２６２３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ００１９４

研究課題名（和文）ムダルニズマ絵画研究　―ルシニョルとカザスを中心に―

研究課題名（英文）Study on Modernisme Painting: the Art of Santiago Rusinol and Ramon Casas

研究代表者
木下　亮（KINOSHITA, AKIRA）

昭和女子大学・生活機構研究科・教授

研究者番号：６０１９５３２８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、カタルーニャの芸術運動ムダルニズマを先導した画家サンティアゴ・ルシニョル（1861-1931）とラモン・カザス（1866-1933）の1890年代 から20世紀初頭までの創作活動について検証し、その作品制作を基に同時代のバルセロナの芸術的環境と、共有された美の規範の独自性を明示することを目的とする。その19世紀末の芸術動向について、画家たちのパリ滞在、北欧諸都市からの刺激、1888年万博に象徴される経済的繁栄、そしてカタルーニャのナショナリズムの高揚など多方面からの考察を試みる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
2019年４月から「奇蹟の芸術都市 バルセロナ」展を全国５美術館で開催し、監修者として各地で講演をおこなった。展覧会図録にはこれまで日本で調査されてこなかった川上音二郎と貞奴のバルセロナ公演についての研究成果を発表した。またカタルーニャ美術館学芸員アドゥアル・バジェス氏を招聘し「ピカソとバルセロナ」と題したシンポジウムを企画・開催した。2020年に本シンポジウムの意義とそれまでのピカソに関する調査によって得られた新知見を論文にまとめた。カタルーニャ美術館と日本の美術館との交流が促進され、後継のスペイン美術の展覧会企画への一助となる関係を築くことができた。

研究成果の概要（英文）：This study examines the creative activities of the painters Santiago Rusinol (1861-1931) and Ramon Casas (1866-1933), who led the Catalan art movement Modernisme, from the 1890s to the early 20th century, and aims to clarify the artistic environment of contemporary Barcelona and the uniqueness of norms of beauty based on their work. We will examine the artistic trends at the end of the 19th century from various aspects, including painters' stay in Paris, stimuli from the Nordic cities, economic prosperity symbolized by the 1888 Universal Exposition, and the rise of Catalan nationalism.

研究分野：西洋美術史

キーワード：ムダルニズマ　バルセロナ　サンティアゴ・ルシニョル　ラモン・カザス　ピカソ　四匹の猫

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景
（１）ガウディのサグラダ・ファミリア聖堂をはじめ、近年バルセロナの芸術への注目度が増していくなかで、日本ではこの都市が経験した 19 世紀末から 20 世紀初頭の文化的興隆の全体像を示す機会は多くはなかった。研究代表者は約 10 年前から数次にわたりバルセロナにおいて作品調査と文献収集をおこない、さらに 2016 年度後半のサバティカル期間に、現地の研究者や美術館学芸員とのネットワーク構築を試みた。

（２）バルセロナにおける様々なジャンルの芸術運動を概観するための学術論文集『西洋近代の都市と芸術６　バルセロナ　カタルーニャ文化の再生と展開』（竹林舎）の構成、執筆、編集を担当し、2017 年 5 月に上梓した。

（３）「奇蹟の芸術都市バルセロナ」展（2019 年開催、長崎県美術館他）の展覧会と図録の監修者として準備を進めるなかで、ムダルニズマの画家サンティアゴ・ルシニョルとラモン・カザスについての調査研究を本格化させることが可能となった。

２．研究の目的
（１）本研究は、カタルーニャの芸術運動ムダルニズマを先導した画家サンティアゴ・ルシニョル（1861-1931）とラモン・カザス（1866-1933）の 1890 年代 から 20 世紀初頭までの創作活動について検証し、その作品制作を基に同時代のバルセロナの芸術的環境と、共有された美の規範の独自性を明示することを目的とする。

（２）バルセロナはガウディ建築と少年ピカソがパリに移住する前の多感な時期を過ごした都市として日本では一面的に紹介されてきたが、19 世紀末のバルセロナの芸術動向について、画家たちのパリ滞在、北欧諸都市からの刺激、1888 年の万博に象徴される経済的繁栄、そしてカタルーニャのナショナリズムの高揚など多方面からの考察を試みる。

３．研究の方法
（１）研究史を整理するために、カタルーニャの研究者による先行研究を重視しつつも、スペイン以外の国で開催されたバルセロナ関連の展覧会や研究成果と比較検討し、さらに日本における受容の過程を検証する。バルセロナ滞在中は、カタルーニャ美術館、ムンサラット美術館、さらにシッジャスのカウ・ファラット美術館などで作品調査、研究者や学芸員との意見交換、研究論文など文献収集に努める。日本ではインターネット上で当時の新聞や雑誌記事の収集を継続し、その文化的状況の検証をおこなう。

（２）バルセロナから新進気鋭のピカソ研究者を招聘し、日本側のピカソ研究者との交流の場を設け、招聘講演、研究発表と討議からなる公開のシンポジウムを企画する。

４．研究成果

　コロナ禍により 2020 年度と 2021 年度は海外出張することができなかった。従って当初計画していたスペインでの調査研究を実施することが叶わず、研究計画の変更を余儀なくされた。ただし新型コロナが確認される前の 2019 年４月から「奇蹟の芸術都市 バルセロナ」展を全国の５美術館で開催し、同展の監修者として各地で講演をおこない研究成果を啓蒙的に社会に還元した。またカタルーニャ美術館学芸員アドゥアル・バジェス氏を招聘し「ピカソとバルセロナ」と題したシンポジウムを企画・開催し、研究代表者としてシンポジウムの意義とそれまでの調査によって得られた新知見を論文にまとめた。結果的にはカタルーニャ美術館と日本の美術館との交流が促進され、後継のスペイン美術の展覧会企画への一助となる関係を築くことができた。

（１）2019 年４月に開催された「奇蹟の芸術都市 バルセロナ」展の展覧会と図録の監修をしたが、2018 年度のバルセロナにおける調査研究と同展の準備の過程でルシニョルとカザスの作品研究を深めることができた。同展は全国５美術館（長崎県美術館、姫路市美術館、札幌芸術の森美術館、静岡市美術館、東京ステーション・ギャラリー）で開催され、そのうち４美術館で講演やギャラリー・トークをおこなった。

（２）ラモン・カザスが描いた素描肖像《貞奴》（1902、カタルーニャ美術館）と《川上音二郎》（1902、演劇博物館）について実証的で多角的な作品調査をおこなうとともに、これまで日本で調査が進んでいなかった川上一座のバルセロナ滞在とヌバタッツ劇場での公演について同時代

的な再構成を試みた。その研究成果は論文「貞奴と「四匹の猫」の画家たち　～日本の舞姫が訪れたバルセロナ～　」に集約し、展覧会図録（2019 年 4 月刊）に寄稿した。

（３）2019 年 12 月 7 日、国立西洋美術館講堂で「ピカソとバルセロナ」と題する招聘講演とシンポジウムを企画・開催した。研究代表者が趣旨説明をおこない、カタルーニャ美術館近現代美術主任学芸員アドゥアル・バジェスが「ピカソとバルセロナ　－ムダルニズマから青の時代へ」の講演をした後、日本のピカソ研究者３名の研究報告の後に討議がおこなわれた。

（４）『スペイン・ラテンアメリカ美術史研究』第 21 号（2020 年４月刊）に「「ピカソとバルセロナ」と研究動向について　―「趣旨説明」に代えて―」を投稿し、19 世紀末のバルセロナにおける美術学校と美術協会、公募展、画廊、さらに少年ピカソが影響を受けたカフェ「四匹の猫」の常連の先輩画家たちについて論じた。ピカソが 20 歳年長であったルシニョルを意識していた点を明らかにしたバジェスのピカソ研究を紹介し、定型化した感のある「神童」ピカソに対する見方に新たな柔軟性を求めた。

（５）「バルセロナ万国博覧会と日本」と題する論文を美術雑誌『美術フォーラム 21』(2021 年 6 月刊)に寄稿した。1888 年にバルセロナで開催されたこの万博は、19 世紀後半にスペインで開催された唯一の万博であり、日本を含め世界 20 数か国からの参加があったが、まずその概要とその開催意義を確認した。本課題で研究対象とする画家のルシニョルや彫刻家のクララソも同時代人としてこのバルセロナ万博に参加している。

　この万博は、バルセロナにおいて海外の先進技術や文化に目を向ける大きな機会であったばかりか、スペインでのジャポニスムの広がりを検証する上で最も重要な出来事であった。日本から出品された工芸品の展示と褒賞について検証し、日本の万博参加に尽力した画家久米桂一郎と旧佐賀藩人脈について考察した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 木下亮	４．巻 43
２．論文標題 バルセロナ万国博覧会と日本	５．発行年 2021年
３．雑誌名 美術フォーラム21	６．最初と最後の頁 67-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 木下亮	４．巻 21
２．論文標題 「ピカソとバルセロナ」と研究動向について　―「趣旨説明」に代えて―	５．発行年 2020年
３．雑誌名 スペイン・ラテンアメリカ美術史研究	６．最初と最後の頁 17-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 木下亮	４．巻 －
２．論文標題 貞奴と「四匹の猫」の画家たち　～日本の舞姫が訪れたバルセロナ～	５．発行年 2019年
３．雑誌名 奇蹟の芸術都市バルセロナ展 図録	６．最初と最後の頁 26-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 木下亮
２．発表標題 招聘講演・シンポジウム「ピカソとバルセロナ」趣旨説明
３．学会等名 スペイン・ラテンアメリカ美術史研究会 冬季研究会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計1件

１．著者名 木下亮（監修）：リカル・ブル、マリアンジェルス・フォンデビラ、フランセスク・フォンボナ、フランセスク・キレス、ビニェット・パニェラ、アドゥアル・バジェス、稲葉友汰、小川かい、木下亮、高瀬晴之、谷口依子、野中明、平井菊花、不動美里、松田健児	４．発行年 2019年
２．出版社 神戸新聞社	５．総ページ数 392
３．書名 奇蹟の芸術都市バルセロナ展 図録	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会 招聘講演・シンポジウム「ピカソとバルセロナ」（スペイン語・日本語）、スペイン・ラテンアメリカ美術史研究会・国立西洋美術館主催	開催年 2019年～2019年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関